

宮城・福島・茨城・千葉の "3・11"

地震が、津波が、放射線が農場を襲った

全国の農場に大きな被害をもたらした東日本大震災。しかし、この２カ月間の報道を見る限り、一部の例を除いては農場の戸別具体的な様子を伝える例は少ない。そこで本誌編集部は４月中旬に現地入りし、深刻な被災をもたらした農場の様子を記録した。11頁にわたり掲載する。

撮影／編集部、西村智浩、田中智己



津波は防潮堤を乗り越え、干拓された水田と集落を飲み込んだ。トラクタは原形をとどめていない。集落の住民は120名のうち生き残ったのは40名程度とされている（福島県南相馬市鹿島区・4月17日撮影）。

防潮林として植えられた松林も無力だった。この地に住む本誌読者もお亡くなりになられたという一報が編集部にも寄せられた（宮城県仙台市若林区荒浜・4月18日撮影）。



半農半漁の集落。町の７割が被災、町役場も鉄骨だけを残すだけとなった（宮城県本吉郡南三陸町・4月17日撮影）。





イチゴやカーネーション用のハウスもほぼ全壊。花を咲かせたカーネーションは避難所や安置所、埋葬施設に贈られたという（宮城県名取市・4月14日撮影）。



「1ｍくらい地盤は沈下しているようだ。満潮時には海水が流入したりする」と太田俊治氏（宮城県石巻市・4月17日撮影）。



栗原市にある伊藤農場のライスセンター。８台もの乾燥機がドミノ倒しのように倒壊している。栗原市は東日本大震災で震度７を記録した（宮城県栗原市・4月16日撮影）。


ISEKI
ISEKI
排土専用
No.3
OSHIMA



救援物資の輸送のため主要道路は早く復旧したものの、一部は落橋等のため通行止めのまま（宮城県石巻市・4月17日撮影）。



ほとんど全部倒壊した、いちご村in米山の高設栽培ベンチ。次の定植に備えて全面修理するため、収穫は諦めたという（宮城県登米市・4月15日撮影）。



パイプラインが破損。液状化現象も起き、圃場内に段差や亀裂ができたため、レーザーレベラーで均平作業をする人もいた（千葉県香取郡神崎町・4月11日撮影）。

郡山市内のイタリアレストランに納入予定だったレタスも県の出荷、摂取制限要請を受けたため収穫ができなかった（福島県郡山市・4月15日撮影）。





原発事故で中国人研修生が3月18日に帰国。「再見」（バイバイ）と書き残していった（茨城県東茨城郡茨城町・4月11日撮影）。



ブロッコリーを栽培している本誌読者を訪れようとしたのだが、福島第一原発から20㎞圏内で避難指示が出されており、道路も封鎖されていた（福島県南相馬市小高区・4月17日撮影）。



オオバの出荷・摂取制限要請があったのは3月23日、安全確認ができたのは4月3日だが、出荷できなかった以上枯らすしかなかった（福島県須賀川市・4月16日撮影）。



ついこの間まで水田だった場所には瓦礫や日常生活品、そして肥料袋や家庭菜園用の野菜の種袋が散乱していた。そのそばでは、桜がまるで鎮魂するかのように花を開いていた（福島県南相馬市鹿島区・4月17日撮影）。